

年賀はがき

JJ1SXA/池

「他見ヲ憚カラス又上包ヲ要セサル短文通ヲ低税ニテ往復ノ便宜ヲ開クヘキ為メ之ヲ各地郵便役所及ヒ取扱所ニテ可売下事」

いきなり難しい？文章ですが、これは、1873年(明治6年)、初めて「郵便はがき」が発行されましたが、その時の郵便はがきは、縦に2つに折り、その内側に通信文を書く形式でした、そして片面に、上記の但し書きが書かれていたのです。

何とも、昔の文章は難しいです、平たく言うと、「他人に見られる可能性はあるけれども、安く販売し便宜を図る…」と言うことのようにです。

その後、「はがき」は現行の官製はがきのスタイルに変わっていききました、そして、年賀状は、普通の官製はがきに年賀のスタンプを押すスタイルから、現在は「お年玉くじ付きはがき」が当たり前です。

このお年玉くじ付きという発想は、官ではなく、民から出たのです、1948年、京都在住の林正治氏(当時42歳)が、「年賀状が戦前のように復活すれば、お互いの消息もわかり、うちひしがれた気分から立ち直るきっかけともなる」と考え、このアイデアを思いつきます。

「年賀状に賞品の当たるくじをつける」、「料金には寄付金を付加し社会福祉に役立てる」というアイデアで、林氏は、そのアイデアをもとに、自ら見本のはがきや宣伝用のポスターまで作り、郵政省(現総務省)に持ち込みます。

郵政省の会議では「国民が困窮している時代に、送った相手に賞品が当たるなどと、のんびりしたことを言っている状態ではない」との反論もありましたが、紆余曲折を経た後、採用が決定、1949年に世界にも類を見ない制度が実現したとのこと。

お年玉くじ付き年賀はがきの登場以来、増え続ける年賀郵便に対応するため、1960年代以降、さまざまなシステム上の改変が行われます。

まず、1961年には、年賀郵便の消印が省略されます、はがきの額面表示の下に、消印に模した丸表示を印刷した今ではおなじみのスタイルは、ここから始まりました。

1979年頃から、官製はがきに絵や文字を印刷する年賀状印刷が盛んになり、デパートやスーパー、文具店などで、好きな文面や図柄を選んで簡単に申し込み、しかもお年玉つきの官製はがきで出せることから、大きな人気を呼び、現在に至っています、1982年からは、郵政省も寄付金付きの年賀はがきを絵入りにしています。

平成に入っても増加を続けた年賀郵便は1997年の約37億通をピークに、停滞ないし微減傾向が続いているようです、これは、景気の長期低迷が続いたことや、インターネットの普及で電子メールが盛んになったことなど、さまざまな理由が考えられるようですが、現在でも国民1人あたり約35通の年賀状が出されているとのこと、すごい数ですね。…以上記事は、フタバ株の「年賀状博物館」より大部分を引用…